

Sample

あぶな絵、あぶり声  
く霞く

Sample  
index

第三話	第二話	第一話
結びの女	叶えたい女	始まりの女
65	35	07



Sample

Sample

第一話  
始まりの女

生暖かい空気のなか、微かに桜の花びらの香りがする。  
ふと作業する手を止めて深く息を吸い込むと、滑らかな風  
がすっと私の頬を撫でていった。ひと月前までは身を縮めて  
仕事をしていたのだが、最近では寝覚めも良いし、一日じゅ  
う外で仕事をしていても苦にならなくなってきた。  
見上げると、社の隣から覗く桜の木が、風に揺られていた。  
大正という年号に馴染み深くなってきた今、にわか環境  
が変化しはじめてきている。

都市全体が確実に活発になってきているように感じるし、  
風景や人々にも少しずつ変化が生まれはじめていた。

私が住む京都も、最近ではカフェーと呼ばれる場で美しい  
女給と共に茶を嗜むのが金持ちの楽しみなのだそう。まだ  
着物の女性がほとんどだが、中には洋服を着ているハイカラ

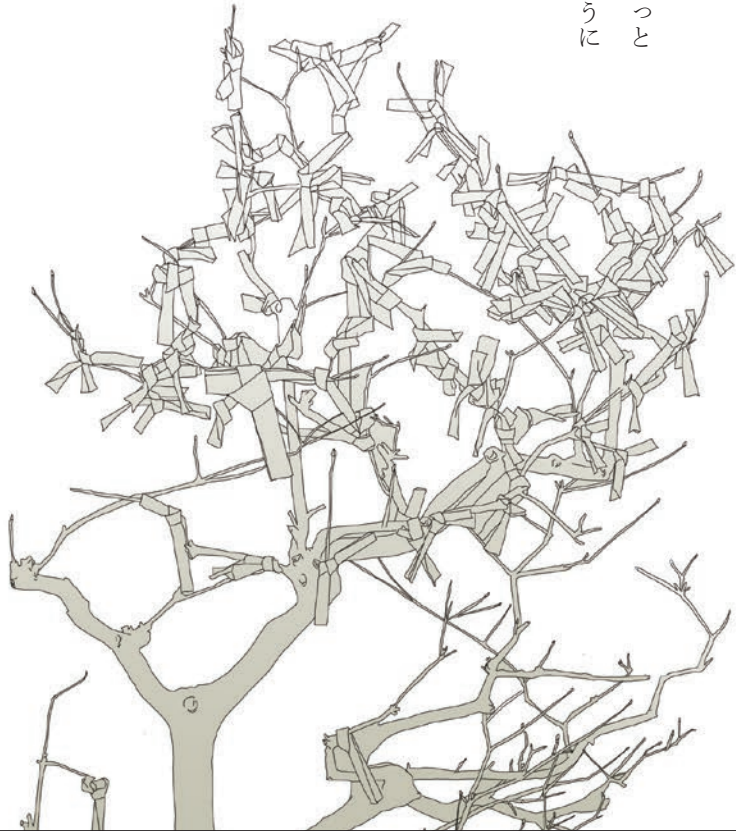
な女も見かけるようになった。最近では女の自由恋愛を詠つ  
た本が同性の間で人気だというから驚いてしまう。

時代は移り変わる。何より、女が元気なのはいい。国が元  
気な証拠だ。

春が来た。

桜の花が散り、はらはらと空から舞い落ちてくる。そっと  
手を広げると、その花びらは着地点を探していたかのように  
私の手のなかに降りてきた。

薄紅色の儂い花びらは新しい季節の訪れを告げる。



私は宮大工をしている。まだ一人前とは言えない見習いの身だが、私が師とあおいでいる棟梁は人を育てることに長けており、そんな彼の元で日々腕を磨いている最中である。

寺社仏閣を修繕し、守り続けるというのが私の仕事だ。

幸いなことにこの尊い仕事は需要があり、日々仕事を頂いている。

年明けから駆り出されているのは五条にある小さな神社だ。

この神社は女の厄除けの神社で、桃の節句には人が雛

人形に扮する祭りを開くことでも有名だ。

だから年明けからの私は、少々憂鬱である。

なぜなら――。

「あつ、いたいた、兄は――ん！」

背中を丸め、木を削っていた手がぴたりと止まった。

黄色い声をあげて三人の女たちが小走りで向かってくる。私は少し身を縮こめながら、隠れようとしてみるが、

所詮悪あがきでしかない。

ぽんと肩を叩かれて、渋々立ち上がった。

女は、あまり得意ではないのだ。

「んもう、相変わらずつれないわあ！」

女たちはころころと笑い、なにかの葉の包みを渡してきた。

「これは？」

「知りまへんか？ この先で有名な団子屋のぼたもちですわ」

「お茶請けにでもしておくれやす」

「いや、心遣いはありがたいが、しかし……」

棟梁を覗き見て助けを請うと、眉を吊り上げて「もらっとけ」と手振りをしている。

女からの贈り物など容易く受け取るわけにはいかないが、ここは、有り難く頂戴すべきだろうか。

「では、皆で頂こう」

包みに手を差し伸べたとき、不意に女の指先に手が当たってしまった。

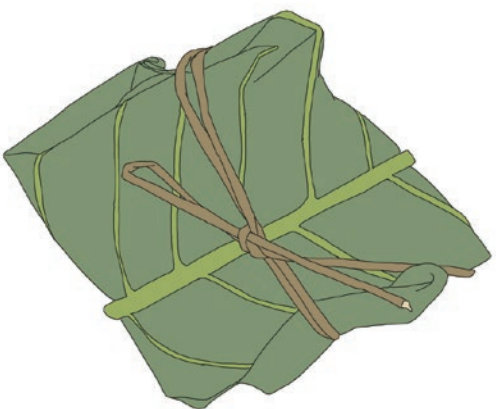
女はびよんと跳ねあがり、高い声が境内響き渡る。

「兄さん、不意打ちやわあ！」

「ああん、こすい！」

女たちはひとしきり興奮したあと、ぼたぼたと駆けていってしまった。

しばらくすると、再び境内はしんと静まりかえり、やがて鳥たちのさえずりが賑やかに響き渡る。





包みを手に取り残された私は、しばしばつんと立ち尽くしていた。

元気にはしゃいでいる女たちを遠目で眺めて平和を感じることは好きだが、触れ合うことは未だに苦手だ。過度に緊張してしまうし、相手を楽しませようと考えると、どう行動すれば良いのか分からなくなり、結局無口になってしまう。

できれば女たちの視界からは消え、静かに過ごしたいとすら感じるときもある。

しかしあの女の場合は、別だ。